



「シアスリートって、実は  
生き方なのかもしれない。」  
卒業生から、物語を未来へ。

# なわ 畷ドラ

四條畷学園100年目のストーリー

## VOL.1

### 〈3年間の変身〉 スポーツ、という進化の原動力。

軽やかで、しかも大胆な  
ショウへ。(リキヤスより。)

「バドミントン部のショウは、普段とても物静かだったイメージが強いんだけど、ショウ(翔)っていう軽快さを示唆する名前が、シャトルコックの浮遊感に富むスポーツとのオーバーラップを思わせてくれて、外側の人物像は割と明快だったかな、僕の中ではね。でも、実際話してみるとこの人は内側がすごくしっかりしてる、芯が入ってる、って言うか。二十数年前の運動部ってみんなそうだったようにだけど、競技一途ですべてそこに集約されてしまう、良くも悪くも。そんな中で醸成されていくのが、現在の彼の言葉でいうところの「レジリエンス」。困難や逆境に直面しても折れずに立ち直り、適応しながら成長するチカラ。学園では、失敗してもいいから試してみよう、といった先生方の温かな指導方針も有ったし、自分自身のふり幅を広げてみる、未来への初期投資期間だったと言っショウだけど...当時、修学旅行で披露するダンスを練習するために、仲間と夜の柔道場へ忍び込み、後で先生に大層とつめられたという話。思い切ったことするよね、まあいいけど。ちよっとふり幅広げすぎじゃない？」

その後もショウは、暮らしの場面面で大胆な決断をして今に至っている。そこはリスベクト。」

あの時も、今も、これからも。  
穏やかな風の吹く中庭で。

「びたすら」っていう言葉、何かに打ち込むことの意味は、そこに身を置いたものでなければわからない...」

ショウ。社会人として、彼は選択を迫られる度、敢て厳しい環境へと自らを立ち向かわせる。足場のない地方へ赴き、努め、新しい自分を発見する。そして今、地元大阪に戻り、熟慮と英断の賜物とも言うべき公職の長、四條畷市長として市政を預かっている。レジリエンス、と彼が口にするとき、挫折しても再生して強くなればいいんだ、大丈夫なんだ、という、乗り越えるスピリットがそこに流れている。リキヤス。学園中学校で養われた基礎学力の高さに気付き、思ったよりもずっと文武両道の認識のもと、相撲の名門高校、大学へと歩みを

真面目で柔軟。いつもまとめ役の  
リキヤスへ。(ショウより。)

「ドスン！」「パチン！」「ドスン！」...激しいぶつかり稽古の気合と息遣いが交錯するあの頃の一場面がリアルに伝わってくる。リキヤスをよく知る先生が熱く語ってくれる相撲という競技はまさに魂と魂の格闘。

名前がリキヤス(力康)で力士を連想させるから、イメージの連鎖は容易い。尤もそれは彼から見た僕も同じだったようにだけでも。学園中学校に相撲部はなかったから、放課後の中庭で友人達と何やかやと会話する間もなく地域の相撲クラブへと直行するリキヤス。君の競技での活躍は特筆ものだし、実際、中学3年の時、学園から表彰もされていた。でも最初は野球をやったかったと聞く。

家族は学園一家で野球一家でもあったから、それがリキヤスの堂々たる体格に鑑みたお祖父さんの意見により出場した地域の小学生相撲大会でいきなり優勝してしまっただんたね。君は時々「度胸」という言葉を口にする。学園中学校時代、音楽の時間に校歌独唱、のテストが有った。皆の前で歌うって、それも度胸一番。そんな凛として純粋な学園生活の一つ一つが総じて生真面目で度量の大きい人間リキヤスの心に響き続けているように思う。君の周りに人は集まる、謂わばみんなの中心、太陽かな。カッコよ過ぎる？」

進め、現在は企業の取締役経営企画本部長。競技での輝かしい実績に加え、誰もが好感を持つその人柄―経営者としての度胸の原点、リーダーとしての資質は中学3年間の学園生活で培われたと考え、15人から時には30人に及ぶ同窓生の家族ぐるみの交流をまとめる役として、信頼を集める存在。

ショウとリキヤス。二人の共通点は家族や親戚が四條畷学園に多く在籍した「学園一家」であること。そして源の3年間を「びたすら」走り抜いたアスリートであること。四條畷学園中学校には、あの頃の、現在の、未来の彼らが、そこに居る。

